

昭和五十一年三月

岩手県文化財調査報告書第四十五集

秋田街道

岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教育委員会

昭和五十五年三月

岩手県文化財調査報告書第四十五集

秋田街道

岩手県「歴史の道」調査報告

岩手県教育委員会

## 序

道・河川などの交通路は、古くから文物や人々の交流の舞台になつており、本県の歴史を知る上にきわめて重要な意味をもつております。

しかし、近年、産業経済が著しく発展し、社会構造が変遷するなかで、かつては交通が大変不便であった山道も改良され、舗装されて近代的な道路にかわりつつあります。これに伴つて街並の並木・番所跡・一里塚などの交通関係の遺跡も急速に失われてきておりますが、本県では、このような現状を重視し昭和五十二年度から国庫補助を受けて歴史の道の調査を実施して参りました。

本報告書は、本年度に調査した七街道のうち、奥州道中の盛岡宿から西へ進み、国見峠を経て秋田藩領にいたる「秋田街道」の岩手県分について、街道の現状と文化財の保存状況など、その周囲の環境を含めて総合的に調査し、その成果を集成したものであります。

本書が、今後の交通関係遺跡の保護及び歴史の道研究の一助となれば幸いります。

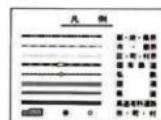
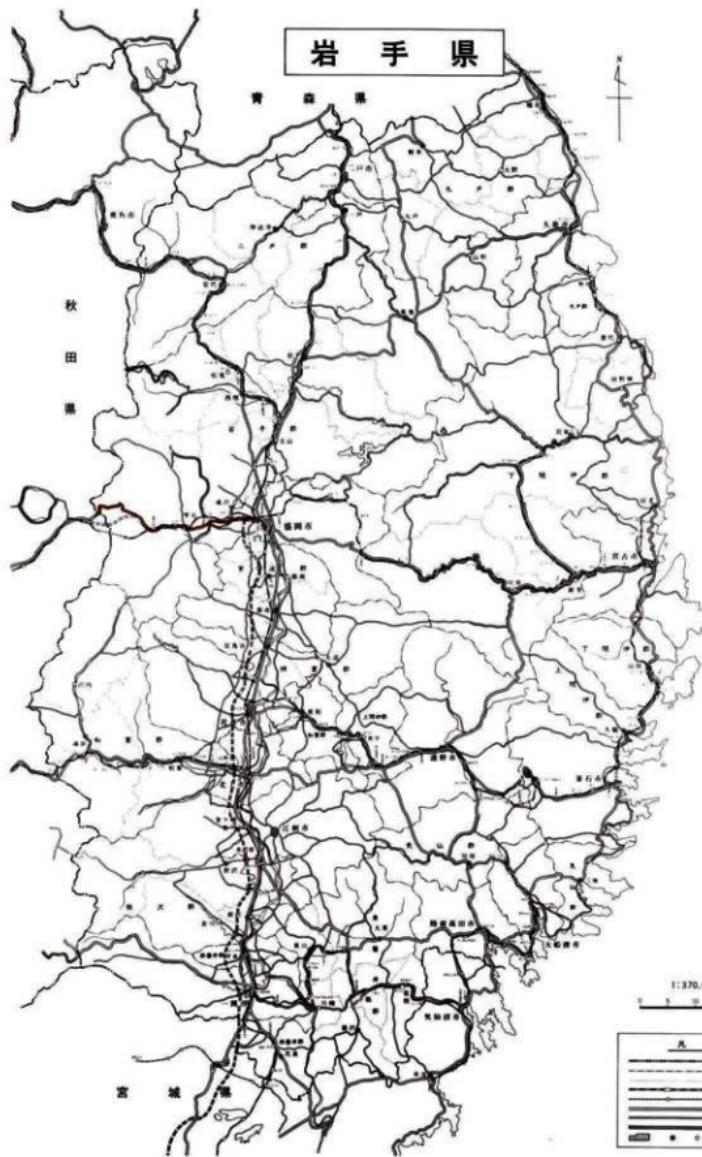
なお、調査に御協力いただきました調査員各位並びに関係市町村教育委員会をはじめ、諸資料を提供してくださった方々に対し、衷心より感謝申し上げます。

昭和五十五年三月

岩手県教育委員会

教育長 新 里 盈

# 岩手県



## 例　　言

一、本書は歴史の道「秋田街道」に関する報告書である。

二、本調査は主として次にあげるものを受け集し、調査を実施した。

(1) 収集したもの

古文書、地誌類、紀行文、古絵図類や明治時代の実測図など。

(2) 調査した事項

ア 道及びこれに沿う地域に残る遺跡の分布状況と保存の実態。

イ 江戸時代の国界・藩界及び都名。

二、本調査の調査員・補助員は左記のとおりである。

主任専門調査員　草間俊一　岩手大学教授

専門調査員　細井計　岩手大学教授

専門調査員　吉田義昭　盛岡市教委文化財専門員

地区調査員（盛岡市）　菊池常雄　浦沢村文化財調査員

地区調査員（平石町）　川崎義仲　前平石町教委職員

補助員　高橋哲郎　岩手大学文部技官

四、調査の方法は、地区調査員が調査カードを作成し、調査カードにもとづき専門調査員が確認調査を行なった。

五、本書は、主任調査員草間俊一が執筆し、文化課が編集にあたった。

日 次

岩手県教育委員会教育長 新里 盛

序  
例 言

一、まえがき	23
二、秋田街道の概要	14
三、秋田街道について	13
四、文化財・その他	10
南部領貞享図	8
写 真	7
地 図	7

## 一、まえがき

ここに云う秋田街道は、明治十四年岩手県が県里道をきめた際、唯一の一等県道秋田街道（盛岡ヨリ宝石・機場ヲ経テ秋田県生保内ニ至ル、途中二駅）とあるもので、岩手県から秋田県に通する最も重要な道であった。秋田街道の名称は江戸時代の記録では明らかにないが、盛岡から出る時は宝石街道と「盛岡砂子」と呼んでおり、宝石では「秋田往来」と呼んでいた。明治五年の上野辨吉の修路の願書に秋田街道とあり、明治八年県道に指定されている。現在の国道四十六号線である。

江戸時代、盛岡に南部氏の居城が置かれた結果、城下盛岡と秋田を結ぶ最短距離の道となつた。しかも、江戸時代の前半、京・大阪の物資は日本海を利用して輸送された際、秋田港に陸揚げされ、陸路この街道が利用されて輸送された。宝曆年間野邊地溝が開かれて、奥州道中が利用されることになつても、盛岡の近江商人は秋田港に陸揚げして輸送する方が、距離も近いのでこの方を望んでいた。秋田の佐竹藩と盛岡の南部藩を結ぶ主要な道路であったので、巡見使もこの街道を利用した。また、幕府その他の諸藩の御馬買衆が仙北郡から国見峠を越えて、平石経由で盛岡に来ていることが田中喜多美氏によつて報告されている。

中世においてはどうかというと、宝石（潤石）に戸沢氏の居城があつて「戸沢氏の所領がこの地にあり、その一族が仙北地方に所領を有し勢力をもつていたので、この道は仙北地方との連絡のために相当利用され、平石と角館との関係が密接であった。この両地方の関係が、山本茂実『塙の道・水の道』（角川文庫本）では「みちのくの夜這い道」と表現しているのは、民俗学的興味からの叙述であるが、事実かどうか疑わしい。また頼朝の東北平泉氏征討に当つて、北陸道の軍が、この道を通つたとするのも疑問である。

## 二、秋田街道の概要

秋田街道は南部藩の古松岡によるものと、藩政時代に秋田街道といわれるものと、一部遺跡が遺っている。即ち、盛岡市出はざれた前潟から十淵を通るのと、小岩井農場本部附近（沼越）—沼越（小岩井農場南端附近）から七ツ森の北側を通つて、晴山から宝石に出たよう古松岡では見られ、この古道は小岩井農場部分はともかく、現在はほとんどどることが出来る。そして、この道に沿つて「里塙が築かれたよう」に絵図面にはあるが、現在秋田街道として、一里塙の残つて、

この街道の調査に当つては、現地調査員として、盛岡市については菊池常雄氏、宝石町については川崎義仲氏を委嘱して調査した後、八月六日午前中、岩手県庁を出発して自動車で園見峠まで行った。途中、二、三の神社・寺院を見学しただけで、その後の補足調査でもらいたいということで、歴史の道の調査としては全く不充分で、執筆もばかられる次第であるが、川崎義仲氏に再度、現状を聞いて執筆したもので、全く不充分であるが、今後の調査で不足分などころは補い度いと考えている。

秋田街道について、「南部養生書」にある郷土誌関係の著者の外、岩手県立図書館の絵図ならびに諸記録「岩手県史」「宝石町史」（宝石町・同教育委員会・昭和五十四年）、田中喜多美氏『宝石町宝石街道の歴史』（宝石町教育委員会・昭和四十二年）などがある。

- ①『岩手県史 第十卷』一二一頁
- ②『宝石町史』九六六頁
- ③『岩手県史 第五』一二六〇頁
- ④『宝石町史』序文（田中喜多美氏著）

いるのは土瀬から大釜に出て、現国道を西に進む秋田街道である。この道に変更したのは、寛永十七年と猪池常雄氏が記しているが、その根柢は明らかでなく、それ以後の『南部藩領内地巡査図』にも篠木坂峠を越える道路が記されている。

それから西へ橋場までは若干道路の変更はあるが、ほぼ現国道に沿っているが、橋場から現国境をそれで左手、南側の坂本川沿いに山を登り仙岩峠に出で、山の北最近い斜面の山道を国見峠へ出て、秋田県の生保内に向って下ることになる。この間「盛岡領内大道筋記」(県立図書館蔵)によれば、

一、盛岡ヨリ滴石ヲ三里 平地山底

此間北上川タ越前筋四十八間深五尺土橋

葛原川渡橋五間三尺

黒沢川十橋四間深空足五寸

一、滴石ヨリ橋場マテ・軍十町 谷川路

此間葛田川広九間深六尺

一、橋場ヨリ[国見峠] (妻) 神城日マテ三里一丁二十八間

此間大山壁所、雪牛馬不通、秋田領小保内へ出ル

とあるが、同書の點賃附の項には「盛岡ヨリ零石マテ四里八丁百廿文」とある。また、宝永七年(一七〇〇)巡査使下向が伝達されて、その道を実測して一里毎に里程標示の木柱を建設した。その際の計測によると次の如くである。

#### 道標數

一拾里六丁拾七間半

内四里拾七丁五拾六間、盛岡より零石町の御れ迄。此内武里二拾四丁九間半、盛岡より仁佐橋越さる栗谷大釜頭

一、吉里廿九丁四拾六間半佐橋越より、町の御札零石頭。同武里拾九丁四拾六間、右之通、江繁井左衛門橋越、左中間杭脚と被成候。(下略)

この秋田街道のうち、橋場から国見峠越の道は容易でなかった。『邦内郷村志』の国見峠とところに「滴石奥羽界山越、此領上、為往還、険絕堅辛勝、其道而左右臨、數百丈之懸谷、故牛馬不通、三冬積雪、絕行人、旬日、逾此山、出丁、秋田仙北部小保内、是云、小保内越也」とある。従つて、明治になって橋場からの国見峠越の道はしばしば改修が行なわれ、国見峠まで登らす仙岩峠(明治九年、この道路の開通によって、仙北部と岩手郡を結ぶ)と、いうのでこの名稱がつけられた)ヒヤ湯より、直に秋田県側に下る道路が作られたり、仙岩峠に出了す、龍川沿いに國見温泉の下を通つてヒヤ湯に出る道に切替えられたが、何れにしても冬期積雪時の車馬の通行は出来なかつたが、最近仙岩トンネルの開通によつて、冬期の通行が可能となりその面目は一新した。しかし、藩政時代の秋田街道は現在も通行可能な状態にある。

## 二、秋田街道について

盛岡城下から、秋田・鹿角・津軽方面への出口として、タケシ橋は重要な橋であった。従つて、藩政のはじめ舟渡してあつたが、早くから架橋の計画が進められた。その橋もその都度洪水のために渡された。それを明和一年(一七六五)梅内忠左衛門の設計によつて、川中に大石でもつて中島を築き、橋桁を高め、両岸から中島に土橋を架けることによつて、架橋に成功した。

タケシ橋を渡り、西にある町並が「新田町」である。「組屋敷百戸」(邦内郷村志)といわれる。足軽市がありその先が「三十軒(間)」で、次に「外形」があった。盛岡城下からの出口は四か所に外形があつた。奥州道中の南の仙北部と北の上田それに浪野・大雄への街道の神子田とこの四か所である。現在その名残りは全くないが、内田米店の附近である。『盛岡砂子』によれば、「外形(中略)是より先、零石街道なり」とある。それから並木が植えられていたと「盛岡砂子」にあるが、今は市街地でその面影は全くない。

次いで、三ツ家のはずで半石川の川岸に出るが、そこには現在太田橋が架かっているが、むかしは舟渡しで対岸の太田村に行つたもので、沢田の渡しといつてゐた。

道は半石川の川岸を西に向うと、右手に稱頌神社がある。前湯から現国道は川沿いに西に進むが、旧道は西北方十瀬を迂回して、大釜の竹鼻で再び現国道と一緒になる。この道路沿いに江戸時代の古碑が立つてゐる。十瀬小学校と神山神社の入口附近に多い。年号は文政十一年のものが最も古い。

竹林から旧道は現国道と同じで、西に向い中道の道路北側に「口向一里塚」が一基残存する。南側のものは破壊されてあとかたもない。県指定の文化財となつてゐる。

旧道は仁沢瀬川を渡ると半石町となるが、それから尾人十文字までは戦前は立派な松並木が残つていて、戦争中の昭和十八年、松根油採取のため切り倒され、現在はなればなれになつた一本の松の木が、昔の名残りをとどめている。仁沢瀬の坂を上つたところに長山への分岐点があり、道標が立つてゐる。

尾人十文字は、秋田街道に小岩井駅の方から来た道が横切つて磐温泉に向う道筋となり、上文字の名がある。秋田街道から磐に向かう道は昔からあつたもので、道が半石川岸下に下りたところに尾入の舟渡しがあって、磐温泉に行けた。この渡しのあつた附近に尾入の番所があつた。これは半石川を下る材木筏の検査をする番所で、「郷土古史見聞記」には「一 物留御番所 尾入 但半 石通り御番所にて、御戻御番所に無之」とある。

尾入十文字から西に一・五kmほど行ったところ、元御所に、沢内街道への分歧点がある。現在ガソリンスタンドのあるところである。沢内街道への正式の道は、後述の半石町からの分岐点であったようであるが、盛岡からくると、この方が便利なので相当古くから使用されていたようである。川崎義仲氏の説では、寛文九年（一六八九）としている。

この分岐点から、西ほど行った、道路の両側に一里塚が残つてゐる。この一

里塚は保存もよくなされている。「生森一里塚」と呼んで、県の指定文化財になつてゐる。前述の「日向一里塚」からこの一里塚まで、自動車のメーターで測量したところ四・六kmで、これから次の高前田の一里塚までも、同じ四・六kmである。四・六kmというと、ほぼ四十二町である。仙北道で述べた七里塚と同様、秋田街道でも四十二町一里で、一里塚が築かれたとも考えられる。

生森一里塚が西に行くと、黒沢川のところで現在半石バイ・バスが作られてゐる。そのバイ・バスの南側に残る農道が、旧秋田街道で現在の国道は少し南よりに生石城跡の堀割から、本丸南側を通る道となつてゐる。旧道は直直ぐに西に進み、生石城跡の北側の崖下を通り、坂道を上つて半石町に入った。この道は明治二十三年の豪雨で氾濫して、大きな被害を出したので、明治十五年から現国道に変更された。

半石町内を通る旧道沿いには、瀬石城跡、永昌寺、臨済寺、広義寺、半石代官所跡、北浦稻荷社、南学院跡がある。半石可並をすぎて、高前田で旧道は西に直進していたが、「半石町はすれ前堂谷地、大ぬがりにて通用悪敷」といわれた道であったので、現国道は西南方に変更されている。旧道は葛根田川の東側では残つてゐるが、川の西側では構造改善事業によつて消滅している。

旧道は奥協ガソリン・スタンド付近で現国道と一緒になるが、春木場部落のはずれで、旧道は南側に迂回して、駆せ下り付近で旧道は現国道と交叉して、国道の北側はさらに田沢湖線の北側に出で、山麓を通りて山津田付近まで現国道で再び国道と一緒になる。この間の旧道は、農道または山麓の散のなかに埋れてゐるが残つてゐる。

山津田から橋までの中道は、ほぼ現国道と一緒になるが、安納附近の南に迂回したところが直線となり、橋場のところでも旧道は南側を迂回している。この間、赤瀬駅の附近に一里塚があったといわれるが、北側は铁道によつて、南側は、住宅（鉤草食堂）によつて破壊されている。

橋場部落のはずれ、半石川の東岸、道路の北側に「橋場廻所遺址」の石碑が

立っている。橋場番所跡と推定して建てられたものであろう。秋田との物資の交易を監視する番所である。

牛石川を渡って現国道に対し西に真直ぐ進む道が旧道で、坂本川沿いに仙岩寺に向かって山を登る。仙岩寺からは山頂の尾根沿いの南斜面(北風をさける)を最近までの国道の頂上ヒヤ瀬(八二五・五田)に出、それから国見峠まで一〇〇mほど登って、秋田県の生保内に向かって下ることになる。この間の道は現存して旧道の面影を留めている。この間の実地踏査をしないまま、報告を書かなければならぬが、川崎義仲氏より聴取したところによると、この間占絵図によると一里塚が三ヶ所にあることになっているが、橋場から旧道に入りて間もなく一里塚らしい大きな石碑があるとのことである。中程の仙岩寺よりやや下ったところの一里塚らしいものが現存するとのことである。仙岩寺には、道路をはさんで秋田県側と岩手県の双方に塚があり、それぞれ石柱が立っている。南部領制のものは「貧是西南秋田領」と刻まれている。國見峠には秋田県側に藩境塚があり、道路の反対側に石柱が立っていて、それには「從是北東盛岡領」と刻まれている。

## 四、文化財・その他

(1) 外形(本文参照)

(2) 沢田の渡し場 現在の太田橋の約百メートル上流で、南岸に舟着場跡らしい石一組ある。

(3) 補荷神社 文治五年頼朝夷州征伐で、工藤行光がこの地を拝領した時に建立したものと伝えられる。文政十二年桜庭氏奉納の扁額、安政五年銘のある額口、宝永二年の宗源宣旨がある。

(4) 神山神社 「奥々風上記」の上西村にあった鹿島神社と神山神社とが合祀されている。附近に江戸時代後期の石碑が多くある。

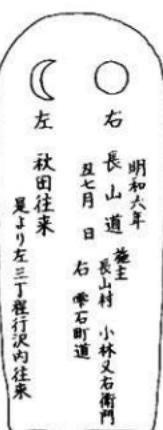
(5) 日向一里塚 昭和四十一年に調査され、その報告に、「塚の裏部は四周と

も欠損されて円形をなしている。東西径は残存部で八メートル、南北径は八メートル五〇センチ。塚の標高より頂部までの高さ二メートル強。右道路より塚頂部まで二メートル強ある(中略)。塚頂には、辺・メートル三〇セ

ンチ、深さ五七センチほどの方形に植栽された跡があり、頂部後に三メートルほどの高さに自生した雜木が七本あった」とあるが、現状は道路わきの叢中の十数種として、その保存管理は良好とは云えず、注意しないと見おとしてしまう。この調査後、現在保護の手が加えられた。

(6) 松並木 この街道の並木の補植は承応二年(一六五二)に一里塚の破損修理と共にに行なわれ、その後延宝元年(一六七三)・元禄四年(一六九一)にも手入れが行なわれ、享保八年(一七二三)にも補植の行なわれた文書がある。従つて、街道の並木は相当立派であったと思われる。その名残りに戦前にあったが、現在幹の大きさ二九三cmと二六三cmの二本が残るにすぎない。

(7) 版樋の遺跡 地上高七五〇。



文政五年の青面金剛と庚申塔と刻んだ石碑と並んで立っている。

(8) 尾入番所跡 藤平作右衛門氏のところに、番所で使用したと伝えられる鉄鍋が保存されている。

(9) 元御所の分岐点(本文参照)

(10) 生森一里塚 昭和四十一年に調査されている。その報告によると、北側一里塚は「塚の東北部が大きく欠損している。東西径は残存部で一メートル

五〇センチ、南北径一二メートル二〇センチであるので、東北部は欠損しているとはいうものはほぼ原形を推察することができる。塚の裾部より頂部までの高さは二メートル七〇センチ、至近道路面より塚頂まで三メートル五六センチ。頂部には径一メートル余、高さ一二メートルほどの松の大樹がある。」

南側一里塚は「塚の頂部がやや削平されおり、平面底形は方形らしい痕跡をとどめており、東西径一二メートル七〇センチ。南北径一二メートル六〇センチ。塚の裾部より頂部までの高さは二メートル二〇センチ。至近道路面より塚頂まで二メートル九〇センチ。頂部に二本の松の木がある。一本は径四〇センチ、高さ一〇メートル。その西にある他の一本は径六〇センチ、高さ一〇メートルほどである。」とある。現状は報告と大差なく、保存も良好である。

(1) 滝石城跡・八幡宮

道路の北側に滝石城跡として塹跡も残っているが、一部埋め立てられ住宅地となつていて。本丸跡には八幡宮が祀られており、正徳二年(一七一七)の銘のある鰐口が奉納されている。

(2) 隅崎寺・万治元年の開山と伝えられる。二十点近く江戸時代の鞍馬がある。

時 内街道の分歧点 古絵図によると、内街道への分歧点で、南に下つて根掘りで半石川を渡つたようである。後には元御所の分歧点が利用されるようになつた。

(3) 広義寺・知新館 広義寺は曹洞宗で、天正年間の開山と伝えられる。境内

に町内御明神竈の滝藤家を移築した、中門造りの曲家が知新館として移築されている。生活史料館として計画されているが、充分整備がなされていない。町の補助を必要とする施設である。

附 半石代官所跡 堂石の代官所跡は、役場として利用されて今日に至つている。

附 二社座神社 昭和四十年に調査されている。その報告によると、北側一里塚は「塚の平面底形は方形で、東西径八メートル五〇センチ。南北径八メートル五〇センチ(以上ママ)。塚の裾部より頂部までの高さは二メートル五〇センチ。至近道路面より塚頂部まで三メートルあるので、塚はほぼ原形の高さを保つているとみなししてよいであろう。塚頂には後に一二メートルほどの高さに自生したケヤキが七本あった。

南側一里塚は「塚の平面底形は隅丸方形で、東西径八メートル二〇センチ。塚の裾部より頂部までの高さは二メートル五〇センチ。至近道路面より塚頂部では三メートルほどあるので、塚は原形の高さを保つているとみて差支えないであろう。塚の頂には、後に補植した杉で一二メートルほどの高さにはえていた。数えてみたら一六木あった。」とあるが、北側は報告の状況であるが、南側の十六木の杉の木は塚及びその周辺から塚上なのか、現状は塚と周辺の杉と混木とが一緒になって、塚の状況ははつきりしない。

附 春木場の観音堂 新軍の観音とも云われている。

附 大船跡 大字上野字山津田の丘陵上にあり、空堀で区切られた四つの区郭をもつ大規模な山城である。誰れ居城か明らかでない。南部藩が秋田に対し構築した山城とも考えられる。

附 山津田の豪傑 もと大船山の中腹にあつたが、しばしば移転して、現在のところに移築したものである。

参考 赤渕の一里塚(本文参照)

参考 宝石御番所跡 「橋場之関遺跡」は昭和二十七年八月御明神村の建立したもので、御番所跡と考えて建てたものであろう。場所としては大きい違いはない。

ないと考える。

〔4〕「三柱神社 銀明神・兜明神・山神の三柱神を祀り、三柱神社と云つて、

る。幡場部落の郷上神で、明和・年（一七六五）の歲申塔がある。

〔5〕仙岩峰藩境塹と櫻柱 道路をはさんで藩境塹が築かれ、南部領の塹は東西  
洋約二・五m、南北洋約二・五m、高さ約〇・七mである。秋田領の塹は、  
東西洋約三・四m、南北洋約四・〇m、高さ約一・〇mで、頂部に高さ一二  
〇mの四角な石柱が立っている。石柱には「從是西南秋田領」と刻まれてい  
る。『下石町史』掲載の資料によると、寛永十六年（一六三九）両藩の御檢  
使立会で御境がきめられており、文化二年（一八〇五）に御境柱を立ててい  
る記録がある。嘉永五年（一八四九）前よりの木柱を石柱に直したとある。  
従つて、この石柱は嘉永五年のものであろう。

〔6〕国見峠藩境塹と櫻柱 通路をはさんで秋田領側には藩境塹があり、幅約三  
mの高さ〇・七mの円形の塹がある。南部領側には塹がなく、台石を置いて  
その上に四角な櫻柱が立っている。台の高さ二八〇m、巾九〇m、奥行八七、  
五〇m、櫻柱高さ・六二〇m、巾二・一〇m、厚さ二八〇mである。櫻柱には「從是北  
東盛岡領」とある。仙岩峰の櫻柱と同時に立てられたものであろう。秋田領  
から登つて来ると、ここから盛岡領になるし奉石側から登つて来ると、仙岩  
峰でそこから秋田領になるわけである。



南部領貞享図（岩手県立図書館蔵）



盛岡市 新田町並および三つ家外形



盛岡市 堀川福専神社



盛岡市・土淵・神山神社



盛岡市 沢田の渡し場跡



盛岡市 土淵小学校台近の旧道



海沢村 日向一里塚



寺石町 並木松



盛岡市 並木松



寺石町 板橋の道様（写真中央の橋の中）



寺石町 左の写真的道様



寺石町 尾入御番所跡



寺石町 秋田街道（右）、沢内街道（左）の分岐点



寧石町 生森一里塚（北塚）



寧石町 生森一里塚（南塚）



寧石町 八幡宮（寧石城跡本丸）



寧石町 寧石城跡の下に向う旧秋田街道



寧石町 寧石城跡東壁の旧秋田街道



寧石町 銀坂下の供養塔



李石町 水晶寺



李石町 大森地藏堂



李石町 蓮清寺



李石町 廣妙寺



李石町 生活資料館（知新館）



李石町 北浦稻荷社



茅石町 代官屋敷跡



茅石町 代官屋敷跡の説明板



茅石町 三社座神社



茅石町 旧街道及び高前田一里塚



茅石町 高前田一里塚（北塚）



茅石町 高前田一里塚（南塚）



寺石町 横塙の旧道（右側）



寺石町 春木塙西の旧街道



寺石町 春木塙西の旧街道



寺石町 大館図



寺石町 山津田の薬師



寺石町 赤羽一里塚跡



寺石町 橋場の旧道（右側）



寺石町 橋場御番所跡



寺石町 橋場の三柱神社



寺石町 坂本川沿いの旧道



寺石町 的方藩境堀 秋田領堀および標柱



寺石町 秋田領の標柱



寺石町 国見峠落塗櫻柱



寺石町 盛岡側の櫻柱

## 秋田街道

26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16	15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1
番号																									



この地図は、建設省国土地理院の承認を得て、同院発行の5万分の1地形図を複製したものである。(承認番号)昭55続復、第228

岩手県文化財調査報告書 第四十五集

秘 田 街 道

昭和五十五年三月三十一日 発行

編集 岩手県教育委員会事務局文化課

発行 岩手県教育委員会

印刷 株式会社 熊谷印刷